図書館ニュース
文化遺遇たまてばこ

第 68 号
2023 年 3 月 11 日

聖学院中学校
高等学校 図書館

命の水

英語科　髙村（たかむら）　聖木（きよこ）

２０２２年２月２４日に始まったウクライナ侵攻の衝撃は忘れられない。かつてロシア語を学んだ私にとって、ロシアとウクライナは不可分だった。対立の歴史はあったとしても同じ東スラブであり、ソビエト社会主義共和国連邦の中の兄弟国だった。ソ連崩壊後も、独立国家共同体として、かつての同胞と痛みを分かち合っている様子を長野オリンピックで目にした。ウクライナ人とロシア人は親族であることも多く、報道で伝えられる容赦ない爆撃の光景に、なぜここまでの事態になってしまったのか、と問いかけることしかできなかった。

今回、図書館ニュースへの寄稿を依頼されたのを機会に、自分とロシア、ウクライナとの関係を振り返ってみた。自分が見落としてきたものが見つかるかもしれない。

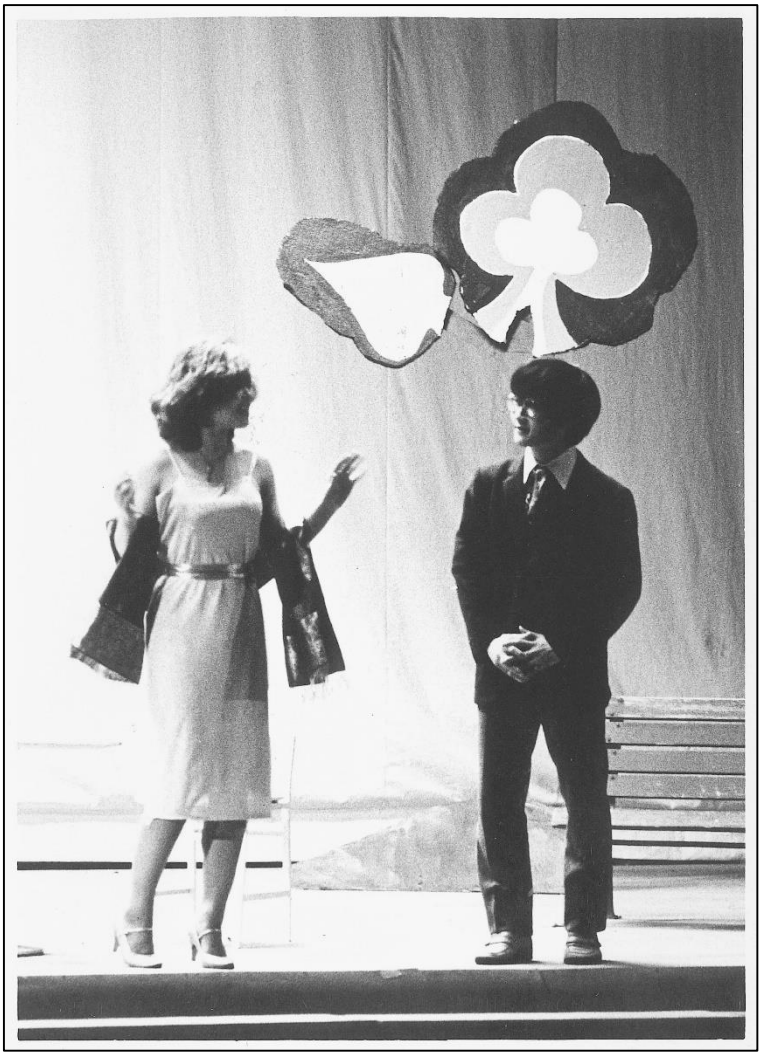
私は１９７８年から東京外国語大学ロシア語学科で学んだ。当時の最高権力者はブレジネフ書記長。ソ連事情講義で学ぶロシア史はいわゆる「大ロシア」的なもので、何の疑問も持たず語られる歴史を覚えていた。後にプーチン論文が言う「ロシアとウクライナは言語、宗教を絆とする古代ルーシの末裔であり、歴史的、精神的に一つの空間である」という見解である。

その頃、私の大学生活で大きな部分を占めたのは「КОНЦЕРТ（コンツェルト）」だった。コンツェルトとは当時、外大、東大、早大で教鞭をとって

いた野村タチヤーナ先生が指導されていた語劇集団で、ロシア語を学ぶ学生たちが集まり、年に1回ロシア語劇を上演していた。文士劇レベルのものだったが、亀山郁夫、米原万里、沼野光義・恭子夫妻、伊東一郎の各氏をはじめ多くのロシア文学者を輩出した。原卓也先生の研究室でミーティングを行い、稽古場は外語、東大駒場、早稲田のキャンパスを転々としていた。コンツェルトは50周年を過ぎた今も活動中である。

3年次にシヴァルツ作「影」という戯曲を演じた。あらすじを紹介する。

お伽噺が実際に起こる国を訪れた学者が王女と恋に落ちる。学者が自分の影に、王女のところに行き気持ちを伝えるよう命じると、影が学者の身体から分離する。分離した「影」は策謀を重ね、王女の心をつかんで王位につく。抗う学者はかつて粛清された医師の助言を受け、「影」に「影よ！　身のほどを知れ！」の言葉を浴びせる。「影」は苦しむが、学者は連行され、首をはねられる。医者が策を講じて手に入れた「命の水」で学者は生き返る。ようやく目覚めた王女は「影」を逮捕するよう命令するが「影」は既にいない。



シュバルツ「影」より

その後1999年に大統領代行として現れたプーチンを見て、タイトルロールの「影」を連想した。KGBからエリツィン政権の中核へと、スピード出世で食い込んでいくプーチンの姿は

「影」がのし上がっていくさまを彷彿とさせた。戯曲はお伽噺の引用にあふれ、明るい結末となっているのだが、現実はどうだろう。ロシア国内の戦争反対運動を鎮圧し、絶大なる権力を持つ「影」（プーチン）に対し「影よ！身のほどを知れ！」の決め台詞で勝利を導く「学者」は誰だろう。はたして「命の水」は存在するのか。

私は、アフガニスタン侵略、モスクワオリンピックへの日本不参加、結婚、出産等様々な理由で次第にロシア語の世界から遠のいていった。卒業後も細々と翻訳等行っていたが、２００５年にタチヤーナ先生が亡くなられてからは更に遠いものになってしまった。

結果、ロシア情勢から半ば目をそむけていた私は、２０１４年のクリミア併合さえ一つのニュースとして見過ごしてしまった。

今回の侵攻後、公開されたウクライナ関連のドキュメンタリー映画を観ながら、自分の中で抜けていた年譜を埋めていった。２００４年のオレンジ革命、２０１４年のマイダン革命に見られる反ロシア運動、２００５年からのガス紛争、２０１２年のチーズ戦争（ウクライナからロシアへの乳製品輸出問題）と、現在に至る混迷の足跡がはっきりと刻まれていた。２０１４年のクリミア強制併合。２０１５年のミンスク合意（当時の双方のジレンマは映画「ウクライナから平和を叫ぶ」に詳しい）。２０１９年のゼレンスキー大統領当選。

侵攻当初、プーチンは「コメディアンあがりのゼレンスキー大統領は侵攻後すぐに逃げ出し、傀儡政権を樹立できるだろう」と考えていたことだろう。その思惑は外れ、ゼレンスキーは踏みとどまり、国民と力強く戦っている。メディア戦略も巧みである。同じくロシアを脅威と感じる周辺諸国が避難民受け入れたり、海外からの軍事支援を受けたりして、持ちこたえている。９月にはハルキウ奇襲作戦が成功し、戦況が大きく変わってきた。

対するロシアでは予備役の動員に対する全国規模の反対デモが行われ、大量のロシア人が国外に逃れ始めている。１０月８日のクリミア橋爆破は「終わりの始まり」とも言われたが、その後も一進一退は続いている。インフラ施設への攻撃から寒さへの懸念も深刻で、１９３０年代ソ連の人為的大飢饉ホロドモールを連想してしまう。２０２３年１月末、ドイツ、アメリカ諸国からの戦車の援助開始も決まったが、戦争終結の見通しはついていない。

ウクライナとロシアの歴史的怨恨の根深さを知れば知るほど、解決策が見いだせない。９月に出版された「プーチンの過信、誤算と勝算」（著者はコンツェルトで同期だった松島芳彦くん）の中に、「この戦争にはいくつもの時間が流れている」という記述がある。

「クリミア併合の延長という意味では数年単位の時間、いまだに続くソ連崩壊プロセスの最終段階としては１０年単位の時間、さらに歴史的ロシアの復活という１００年単位の時間が深層を成している。時間と空間の錯綜を狂気という」。

タチヤーナ先生との読書会（のあとのブリヌイパーティ）

前述のように入り組んだウクライナとロシアの歴史的・軍事的背景を検証しつつ、未来を見据えてこの狂気を抑えていかなければならない。

過去を振り返る中で、遠ざかっていたロシア関連の友人と再会し、若者たちにも出会った。ポーランドのウクライナ国境付近でボランティアを行った東京外大の後輩たちからは、ウクライナ避難民の実情とともに、多くのロシア人の若者が反戦の思いを胸に、黙々と援助を続けていた様子を聞いた。情報操作に惑わされず、世界情勢を知る在日のロシア人たちが、苦悩している様も目にした。「夢破れて」ロシアから遠のいた私だが、ロシア語の世界に回帰した今、こんな私にもできることを新たに考えていこうと思っている。聖学院から送り出した生徒の中にはロシア語に興味を持つ者もいて、辞書や学習書を譲ったこともあった。今後も大きな期待をこめて尽力していきたい。また、自らも踏み込んだ援助活動を行っていこうと考えている。

右往左往する私に比べ、本校の図書館は、一歩先を進んでいる。ウクライナ避難民の講演を企画中、と聞く。同講演はウクライナ避難民だけでなく、ポーランド人やロシア人も招き、互いの見解に耳を傾ける貴重な機会となるようだ。とてつもなく複雑で、大きな問題解決に向かい考える場として、ぜひ、生徒諸君の参加を促したい。

最後に一言「ウクライナに一日も早く平和を！　Слава Україні！」

参考文献：

・エヴゲーニー・シヴァルツ作　佐藤恭子訳「影」現代世界演劇１０　政治寓意劇（白水社）
・松島芳彦著「プーチンの過信、誤算と勝算」（早稲田新書）
・セルゲイ・ローズニツァ作「バビ・ヤール」「ウクライナから平和を叫ぶ」

生徒作品

高校二年　「沖縄を歌う」

高校二年では「沖縄を歌う」と題して、沖縄平和学習の思い出を和歌か琉歌で歌うコンテストをおこないました。入賞者の作品を掲載します。

【金賞】

A組　林田　信治

三線の　音色に耳を　傾けて
沖縄想い　歴史を紡ぐ

【銀賞】

A組　高橋　一太

琉球の　海の青さと　人々の
優しさふれし　美しきかな

C組　北村　知慈

海岸に　打ち上げられた　悲しみは
真砂の中に　いつかは埋もれる

C組　木畑　凛太郎

南方人　凛々しい髭を蓄えて
酒瓶傾け　はいさあああい

C組　村上　琥羽

もう過去の　遺影は燃えて　灰となり
持ち歩くのは　新たなカメラ

D組　山田　陸

黄昏の　朱に染まる空　窓越しに
いと美しき　額縁のよう

【男子校哀歌】

すれ違う共学校に思いをはせて

C組　榎木　秀悟

神奈川県　平沼高校
長野県　野沢北高
いと悲しきかな

【グルメで賞】

美味しそう！

D組　渡辺　一洸

路地の裏　出汁の香りに　つられれば
太もち麺に　トロ軟骨

2022年沖縄平和学習にて

二〇二二年度活動日記

〔四月〕

4月6日（水）、新中学一年生を迎えての入学式を実施。

翌日7日（木）から授業開始。だいぶ新型コロナの感染状況が落ち着いてきたとはいえ、今年度もいまだ新型コロナ感染症の影響下にあるため、昨年度と同様、授業期間中の開館時間は8：00～18：30（通常7：30～18：30）としました。

12日（火）には、国語の時間を使って、新中学1年生向けのオリエンテーションを実施。

また、20日（水）には、2022年度初めての図書委員会を実施。2021年度はなかなか実施できなかった対面での委員会を、久々に開催することができました。

〔五・六月〕

昨年度、オンラインでの雑誌バックナンバーの販売に取り組んだ図書委員が、今年度も雑誌バックナンバー販売の実施を提案。昨年度ほどには感染状況は深刻でないため、今年度は対面で実施することに。

しかし、「1日のみ・早い人順」だと「密」になってしまうので、抽選販売とし、申込期間を数日間、設けました。そのおかげで雑誌販売は混雑することなく終了。売り上げは27，600円にのぼり、全額「シャンティ国際ボランティア会」へ寄付しました。

「戦後の日本と世界」コーナー

〔七・八月〕

毎年、夏休み中に都内の高校が合同で図書館を公開する「東京・学校図書館スタンプラリー」。今年は感染状況が落ち着いていたため、2019年ぶりに実施することができました。

とはいえ、引き続きコロナへの警戒が必要なため、来館者に対する特別な対応はせず、見学のみに。それでも、11名の学外者の方に来館していただきました。

〔九・十・十一月〕

昨年度は、オンラインと（規模を縮小しての）対面というハイブリッドな記念祭が実施されましたが、2022年度は対面のみでの実施となりました。

しかし、基本的な感染対策である入場人数・滞在時間の制限は必須です。

このような状況で、図書館まで何人の来場者が足を運んでくれるだろうか

と思いましたが、結果としてかなりの盛況となり、対応する図書委員は大忙し。

特に、クイズ「ぶた館長を探せ！」は好評で、多くの来場者に楽しんでいただけたようです。

記念祭の準備にいそしむ図書委員

〔十二・一月〕

12月に入り、国内の新型コロナ感染者人数は増加しましたが、昨年とは異なり、3学期も対面授業が継続され、図書館も開館を続けました。

しかし、それでも2月1日（水）から始まる中学入試の感染対策のため、前週の土曜日（1月28日）放課後から試験会場となる校舎は生徒立ち入り禁止に。

図書館も同日の13：00から閉館しました。

〔中島秀男〕

記念祭で館内にて演奏を披露する吹奏楽部

「Surprise gift」コーナー

教職員によるリレーエッセイ

教職員によるリレーエッセイとは、毎月発行している「図書館だより」に教職員がリレー方式で作品を寄稿するものです。２０１３年度から絶えることなく連載を続けてきたリレーエッセイは、今年度掲載１００回を迎え、完結することができました。

ここでは、昨年２月号から９月号で発表した７人の教職員の作品を紹介します。

また、間に掲載しているポップは、中１生徒が国語の授業で生徒が作ったものです。

～第９４回～　図書館だより２月号

（前回）佐藤　充恵　先生

↓　音楽科　川西　祐毅　先生

人は人生の中で、様々なことに直面します。それらに、すぐに対応できることもあれば、時間がかかることもあります。向き合って考えることで、糸口や答えが見えてくることもありますが、その一方で、なかなか解決できず、悩むこともあります。

私は大学生の時に色々と悩んだとき、様々な授業から学んだことを応用してみたり、人と話したりして、何とか、より良い方向へ進められたらと、もがいていました。そのような時、よく書店や図書館へ行きました。これは現在も同じです。なぜならば、そのような時に本が沢山あるところを歩いていると、思いもしないところで「鍵」となる本に出会うことがあるからです。

私という人生は一つしかなく、その人生の中から経験できることは限られています。そのような中で、本を読むことで、様々な著者や本の中の登場人物の人生や価値観、経験を疑似体験することが可能となります。我々は先人たちが色々と考え、悩んだことについて、本を通して体験し、学ぶことが可能です。そこから更に一歩先へ進むことも可能ですし、本当にそうだろうかと検証することができます。

音楽の世界では、練習を積み重ね、レッスンを受ける中で自分を成長させていきます。そして、練習を積み重ねる中で大切なことは、どのように自分を俯瞰し演奏を感じることができるのか、指導者からどのように学ぶのか、というマインドである、と感じています。

レッスンで先生からアドバイスは頂けます。しかし、ただこなすだけでは、形はできても本当に成長するとは限りません。本当に成長したいと思う時、

自分ごととして咀嚼し、自分のものにすることが求められます。頂いたアドバイスを実践し、自分にはどのようにして使えばよいのかを検証して、実験して、自分の中に取り入れていきます。

人は、人生経験が豊かになるにつれて感じることが変化してきます。それは演奏も同じで、日々自分の成長が演奏に現れます。私は、これが楽しくて仕方がないのです。だからこそ、これからも日々何事も探求することを、心から楽しんでいきたいと考えています。

発行：２０２２年２月２６日

～第９５回～　図書館だより３月号

（前回）川西　祐毅　先生

↓

数学科　福井　純平　先生

子どもの頃、本を読むことをとにかく避けていました。

何故そうなったのか、と考えると…恐らく原因は学校の課題の読書感想文。「次の本の中から１冊を選んで感想を〇字程度で書きなさい」というもの。

文を書くということがそもそも嫌いだったことに加え、まったく興味のない本を読め！だなんて。そんな指示に当時は心底うんざりしたことを覚えています。内容に没頭するほど集中できる気もせず、毎回本の選び方はページ数の少ない薄いもの（それでもそれなりのページ数がありましたが）。それを何とか読み終え、「難しかったなぁ」「つまらなかったなぁ」と思いながら、何時間も何時間も、何を書こうか頭を悩ませる。そして「また次の長期休みも読書感想文あるのかぁ」と溜め息…。

そんなことを繰り返し、本から気持ちが大分離れていた頃。友人から「面白いよ！読んでみなよ！」と薦められた本が、星新一の『未来いそっぷ』という本の「ウサギとカメ」の話でした。

正直なところ、友人に薦められた以上は一応読んだほうが良いだろうと思っただけで、期待なんてしていませんでした。とりあえず、「ウサギとカメ」だけ読めば良いや、と目次を開いたところで…目を疑いました。ほぼすべての話が１つ１０ページもない。何なら５ページもない話もちらほら。信じられないほど短かったのです。

それだけでも相当な驚きだったのですが、薦められた「ウサギとカメ」の内容も、誰もが知っているイソップ物語をアレンジしたものということもあり、読みやすく、そしてしっかり面白い。普段、本を１冊読むのに何日も何

日もかかったあの頃の私が、その日のうちに『未来いそっぷ』すべてを読み終えるくらい魅力的でした。

その後は彼の本をひたすら読み漁りました。この頃ほど本に没頭したことはありませんし、そのおかげで本に対するアレルギーのような気持ちはきれいに消えたのだと思います。

あのとき友人が『未来いそっぷ』を教えてくれなければ、私は今も本を全く読まなかったでしょう。すべての本を全く面白くないと思ったままだったでしょう。つまらない自分の考えを変えてくれるような、そんな本を、作家を知ることができて、心の底から良かったなあ、と感じます。

発行：２０２２年３月１８日

～第９６回～図書館だより４月号

愛の言葉がもたらすもの

（前回）福井　純平　先生

↓　**聖書科　久保　哲哉先生**

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」

（マタイによる福音書４章４節）

この原稿を依頼された際、ある絵本の専門家が「子どもは『言葉』でできている」と語っていたことを思い出しました。要約すると①小さな子どもは親の言葉を真似することで言葉を覚え、成長していく。②親が常に良い言葉を話すのが理想だが、難しい。③良質な言葉が記された絵本をたくさん読み聞かせることで、子どもが明るく元気に育つ。というものでした。近年は、脳科学的な観点からも、絵本の読み聞かせは子どもの脳の発達に大切だ、というデータも出ていると知りました。

そんなとき、ある１冊の本に出会いました。それは『クシュラの奇跡』（ドロシー・バトラー、１９８４）という書物です。少し内容を紹介しますと、クシュラは様々な課題をもって生まれたニュージーランドの女の子です。染色体異常で脾臓・腎臓・口腔に障がいがあり、筋肉の発達にも課題があったため、１日に２時間以上の睡眠ができず、誕生した当時は１歳まで育つのは難しいと言われていたそうです。しかし、生後４ヶ月から両親が１日に１４冊（！）の絵本を読み聞かせたところ、３歳になるまでは物が握れず、自分の指先より遠いものはよく見えなかったそうですが、５歳になる頃には同年代の子どもたち以上に知恵が増し、元気に走り回ることができるようになった

とのことです。繰り返し絵本を読み聞かせ続けた親の愛と、絵本にちりばめられた素敵な言葉が起こした奇跡なのだと思いました。

さらにいえば、聖書には私たちを勇気づける励ましの言葉がたくさんちりばめられています。２０００年以上の間、世界中の人々を元気づけてきた父なる神の愛と、聖書に記された神の言葉を真剣に聞くときに、絶望が希望に変えられ、この世界を生き抜く力を得ることができるのだと再確認したのでした。

発行：２０２２年４月１３日

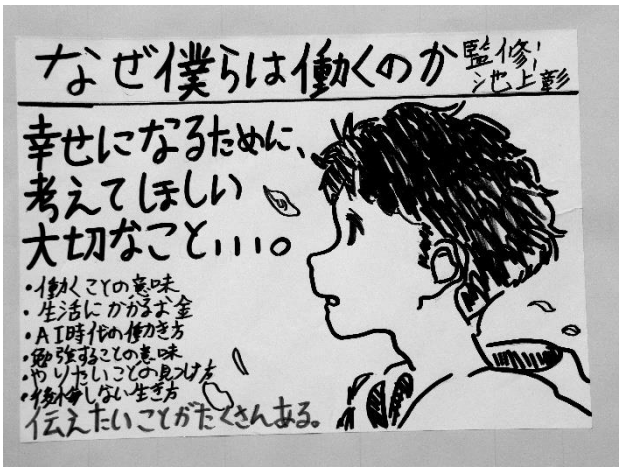
～第９７回～図書館だより５月号

読書徒然

（前回）久保　哲哉先生

↓　岩楯　陽子さん

告白。司書としては何ですが、読書家というほど本を読んでいるとはいえません。それでも趣味は読書です。というか本を見るところから始まります。初めて行く町ですと本屋さん、あるいは図書館があるか気になります。あれば本屋さん、図書館をぐるりと歩いてどんな本があるか見て回ります。場所によって置いてある本、置き方がちがって、今まで気に留めていなかった本に出会うことがあります。（もちろん探している本がある時は検索して書架にまっしぐらです）。



少しでも本を読んで一日が終わると充実した気分になります。大作でなくてもよいのです。好きな分野は文学、児童書です。

私の子どもの頃より絵本が充実しているように思います。書店で見かけて、これは家で大切に読みたいと思った一冊。『ビロードのうさぎ』（マージェリィ・W.ビアンコ著、酒井駒子絵・抄訳、ブロンズ新社、２００７）。この絵本がきっかけで画家、酒井駒子さんのファンになりました。

詩のリズムに身をゆだねるのもいいですね。詩を気軽に楽しみたくなる一冊。『ぼくがゆびをぱちんとならして、きみがおとなになるまえの詩集』（斉藤倫著、高野文子画、福音館書店、２０１９）。

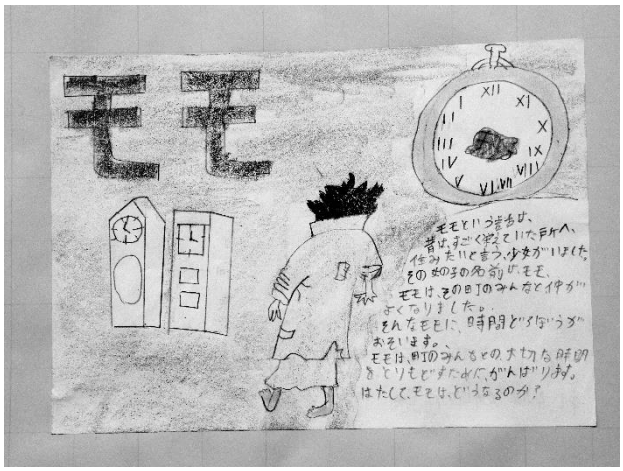
たまには、ほぼ完徹で夢中で読むこともあります。そんな本に出会えたら幸せです。最初の緊急事態宣言中の連休、巣ごもりして読んだ一冊。『宝島』（真藤順丈著、講談社、２０１８）。戦後の沖縄で若者たちは何を感じどう生

きたか。読みだしたら止まりませんでした。

本は表紙を開いたらその世界に入ることができるどこでもドア。本を開いたその人しか知ることができません。

好きな本に出会うとその世界を誰かと共有したくなりますが、案外、身近に同じ本を読んだ人がいなかったりします。読む傾向が偏ったりもします。紹介された本を読むかどうかはお互いの自由として、皆さんはどんな本がお好きなのかしら。あるいは、本をあまり読まないとしたら、どうしてなのかな。気が向いたら図書館に足を運び、教えていただけたらうれしいです。

発行：２０２２年５月７日



～第９８回～　図書館だより６月号

（前回）岩楯　陽子さん

↓　司書　古川 郁 さん

２０２２年３月発行の「図書館ニュース」寄稿の続編です。実は、大学の生命系の研究室に所属しています。研究者ではありませんが、人間性豊かで探究心旺盛なメンバーに恵まれ、基礎研究のリアルを肌で感じる、普段の学校図書館とは違う境地にいます。そこは何処をどう切り取っても、まさに秘境です！

私がいるのは、魚類と哺乳類の脳のメカニズムを研究しているところです。例えば、魚類ではどちらの性別を恋愛対象（あるいは配偶者、パートナー、つがいの相手）に選ぶかで自己の性別が変わるそうで、それに深く関与する遺伝子やホルモンの役割をさまざまな研究手法により解析しています。また魚類の世界にもヒエラルキー（あるいは序列、カースト）があるそうで、身近な話では、家のメダカの水槽をじーっと見ていると、メダカ同士のケンカかなと思う場面を目にします。伺ったところ、メダカを集団で飼うと、頂点に立つ強いメダカは餌を与えられる場所では他のメダカを排除する行動をとるのだそうです。童謡「めだかの学校」のように「だれがせいとか　せんせいか」というのんびりした光景とは程遠く、実は序列を作ることを初めて知りました。少し衝撃でした。実に小さな

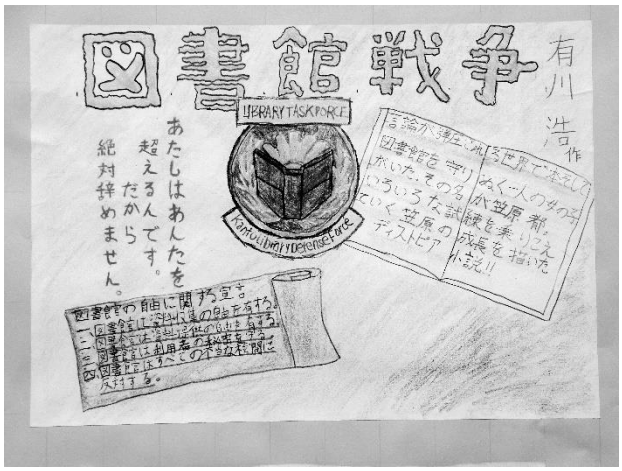
体の脳内は神秘に満ちています。

哺乳類の脳の研究では、繁殖をコントロールする（あるいは発情を引き起こす）脳内ホルモンについて解析を進めています。これは種の保存はもちろん、家畜であれば、その生産性に大きく影響する研究です。繁殖力の低下が懸念される一方、野生動物や動物園動物の過剰繁殖もまた大きな問題です。脳内ホルモンの基礎研究はこれらの課題解決に寄与します。

私自身は研究費の管理、出張などの事務処理や実験用動物の管理を主に行っていますが、メンバーの実験に興味があり、「ぜひ覚えたい」と申し出て、最近は少しずつ実験補助に携わるようになりました。まだ駆け出しで、ＰＣＲや電気泳動など大学院生に教えてもらっている修行の身です。一歩一歩試薬の知識も学び、スムーズに行えるようになりたいと思っています。また先日、ウシの卵巣の中にある卵胞から卵子を取り出す手法を習いました。ウシの卵巣の大きさはどれくらいだと思いますか。あの巨体の割には小ぶりでピンポン球くらいのサイズです。そこからシリンジ（注射器）で卵胞液を吸い取り、最終的に顕微鏡を用いて卵子を取り出していきます。このような地道な工程を経たものが研究へと繋がっていくのです。

唯一の取り柄は何歳になっても好奇心旺盛なところでしょうか。未知の領域に一歩足を踏み込んで以来、その世界に魅了されています。聖学院の学校図書館は読書する場、学習する場だけでなく、様々な人、ものが混在するユニークなところです。ぜひ宝探しの感覚を味わってみてください。私は複数の職場、領域に関われることに深く感謝しながら、皆さんを応援していきます。

発行：２０２２年６月１１日



～第９９回～　図書館だより７月号

古き良き

（前回）古川　郁　さん

↓

ぶた館長

代筆：司書　山中　裕紀子　さん

こんにちは、図書館のぶた館長だ。ボクはブタだから文字は書かない。司書の山中に代筆してもらうよ。

このリレーエッセイも９９回目、次

をもって１００回を迎えるのだ。

２０１３年３月号で第０回と称して前任の司書中山からスタートし（山中じゃないよ、別の人）、次の４月号で中山に代わって着任した中島が第１回をスタートさせたのがはじまりだ。

ボクはリレーエッセイがスタートすると同時にこの図書館にやってきたのだ。着任してから１０年目だな。今となってはまるで学校の公式キャラクターのように使ってもらっているけど、本職は図書館の館長なのでよろしく。

司書の山中は観劇という趣味があって、先日横浜のある劇場のコピー（広告文）で「劇場は古き良き思考と、新たな視界の宝庫」という一文を見かけたらしい。読書の醍醐味もこれかもしれないな。

古い小説、随筆や論説から学ぶこともあれば、新しい視点を得るためにその分野の最先端の研究者や専門家が書いた本から学ぶこともある。新進気鋭の作家が書いた文学作品からみえる景色もある。山中は新しいものを読むことを好むようだけど、その中にまた古き良きものが流れていることも多いらしい。複雑だな。

図書館だよりのリレーエッセイは２０１３年スタートでまだ１０年経っていないので、「古き良き」とまではいかないのかもしれないけど、図書館から眺める景色はたった１０年足らずでもずいぶん変わったなあ。

生徒がタブレットなどの自分の端末を学校で使うようになった。これが一番大きな変化だな。コソコソ携帯をいじる生徒を必死で注意していた立場からすれば、授業や自習時間に堂々と使う今の状況がこんなに早くやってくるとは思わなかったよ。

図書館だから今は本がずらーっと並んでいるけど、電子書籍が当たり前の世の中になったら、ここはどういう景色になるのかなあ。でも、本は「古き良き思考と、新たな視界の宝庫」、これだけはどんなに本のスタイルが変化しても変わらない気がする。深いな、この言葉。

発行：２０２２年７月８日

～第１００回～　図書館だより９月号

（前回）山中　裕紀子　さん

↓　**校長　伊藤　大輔　先生**

「教職員リレーエッセイ」１００回目、最終回です。

最終回の原稿を執筆するにあたって０回目から読み返しました。読み返しながら考えました。読書って何だろうか、と。

私も本を読んできました。どうして本を読んできたのか。「読む」に共通していたものは何かあったのか。私の場合の読書は、その後に誰かとの「対話」を期待していたからだと思います。

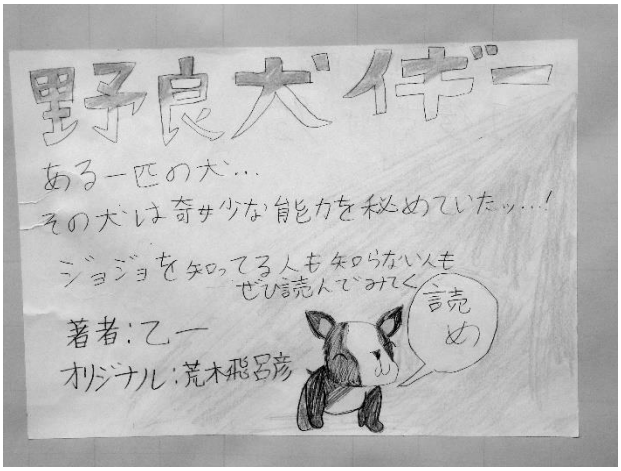
「読む」「対話」。ここには「言葉」があります。人はどうして言葉を発展させられたのか。ある学説では人が言葉を発展させてきたのは、コミュニケーション、自己確認などの理由もあるが、それ以上に「うわさ話」をするためだった、というものがあります。これは結構、有力なようです。考えてみると、言葉が次から次に出てくる状況は学説を唱えたり、一日を振り返ったりする時より「うわさ話」をする時です。「うわさ話」。空想があたかも真実であると考え、語ることです。

私の読書も「空想の言葉」「うわさ話」をするためでした。学校で課せられた読書は先生との対話が想定されていました。だから学校で薦められる読書はおもしろくありません。先生と「うわさ話」で盛り上がれるとは期待できなかったからです。相手が友達となると変わってきます。彼女となるともっと真剣です。こんな話、あんなこと、と「うわさ話」がふくらんでくると本の言葉もどんどん入ってきます。相手は人に限ったことではありません。町や自然、樹木や建築物も「うわさ話」の相手になります。「あなたにはそんな性質があるのですね」「歴史、いきさつがあるのですね」「でも本当はこうしたかったんじゃないの」。読書は一人「うわさ話」も可能にします。

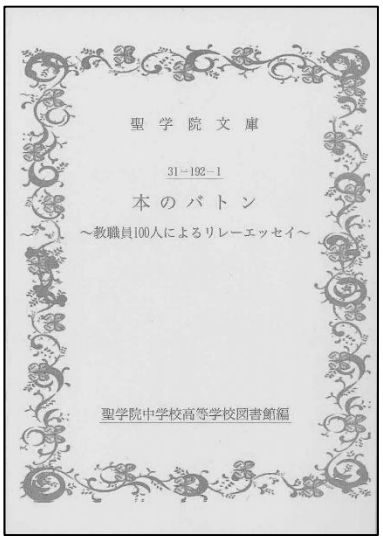
私の最近の「うわさ話」の相手は「未来」です。未来の価値観、思考、常識。未来の人間はどうなっているのか。読書をすると「未来」と「うわさ話」をしたくなります。

「教職員リレーエッセイ」。私の中で「未来」との「うわさ話」が始まっています。

発行：２０２２年９月８日



「本のバトン」刊行



「教職員によるリレーエッセイ」は、第１００回の伊藤大輔校長の執筆をもって完結しました。これを記念し、これまでの１００回のエッセイを編纂し、「本のバトン」と題した１冊の文庫本にまとめました。

図書館で配布しているので、希望者はカウンターまでおいでください。

また、リレーエッセイに替わり、新企画「バトンのしおり」を実施しています。

これは、教職員が撮影した写真を載せたしおりを、月替わりで配布するというものです。

しおりは、本の貸出時にお渡ししています。

図書館ＨＰが新しくなります

図書館ＨＰのＵＲＬを変更します。

新しいＵＲＬは「https://boys-lib.seigakuin-univ.ac.jp/」です。

また、ＵＲＬ変更に合わせデザインも変更します。どんなデザインになるか、お楽しみに！

開発中の図書館新 HP

図書館ニュース第６８号

発行日　２０２３年３月１１日

発　行　聖学院中学校・高等学校 図書館
東京都北区中里３－１２－１

図書館ホームページ
https://boys-lib.seigakuin-univ.ac.jp/

この冊子の著作権は、すべて聖学院中学校・高等学校図書館に帰属します。冊子の一部または全部を無断で複写、複製、転載、電子化することを禁じます。